

五月一五日（月）

芽衣さんは颯爽とキッチンへ入り、食後のお茶を段取りしてくれている。

「急に押しかけたのに、手土産もなくてすみません」

彼女はティーカップを出しながら、「いえいえ」と言った。

「こちらこそ、お昼ご飯買ってきてもらって」

彼女はしゃべりながらも、テキパキと紅茶を入れてくれる。角砂糖の入った瓶と、「子供用の牛乳しかなくて、すみません」とミルクを小分けにして出してくれた。お言葉に甘えて、砂糖とミルクを少しだけ入れる。

「でも、結局ご馳走になっちゃって。良かったんですか？」

私の手元には、かかった費用分の代金がきっちりと積み上げられている。芽衣さんが「いいんじゃないですか？」と笑ってくれたのを見て、財布にしまう決意がようやく固まった。

廊下の奥の方から、A4サイズのクリアファイルを持った森田さんがやって来る。

彼は、芽衣さんの「映美は？」の問いかけに、「向こうでぐっすり寝てる」と返し、私に中の書面が見えるようにファイルを差し出した。

「忘れないうちにコレだけ。と言っても、大したもんじゃありませんけど」

先日のアンケートのようだった。パッと見る限り、ぎつしりと書き込まれているらしく、読み応えは十二分にありそうだった。「先日は本当に、ありがとうございました」

「こちらこそ、いい経験になりました」

森田さんに合わせて頭を下げる。向こうは、「じゃあ、僕はコレで」と踵を返した。「ゆつくりして行ってください」と言い添えて、来た道を帰って行った。

芽衣さんはチャリと壁の時計へ目をやった。もうそろそろ、午後一時三〇分。

「もうそろそろ、上のお嬢ちゃん——」

「あ、ごめんなさい。気にしないでください。今日は旦那もいますから」

彼女は軽く頭を下げると、ゆつたりした雰囲気醸すかのように、のんびりした動きで紅茶を口元に運んだ。在宅ワークがしやすいご夫婦とはいえ、家事にも子育てにも積極的な旦那さんがいるというのは羨ましい。

ジッと芽衣さんを眺めていると、彼女は自分のスマホを手に取った。画面をジッと見て、私の方を見て、「すみませくん」と謝った。

「せっかくのお申し出なんです、身内だけでやろうってことで」

「そうですか」

「何かあれば、お義姉経由でお願いするので、今回はお気持ちだけいただいております」

芽衣さんは「おむつケーキ、可愛かったんだけどなあ」と呟きながら、スマホを操作して返事を打っている。あちらがそういう取り決めをしたのなら、仕方がない。すんなり引いて、また出直すでしょう。

芽衣さんは、「香帆さん、香帆さん」とスマホの画面を私に向けてくれた。ちよつと血色が良くなった新生児と、愛おしそうに抱く若いお母さんの写真。

「晴の一字で、ハルちゃんですって」

芽衣さんは空いている方の手で、空中に文字を書いた。きつと、周りを明るく照らす活発な子に育つのだろう。母子ともに健康なのであれば、それで十分なだけだ。

芽衣さんは、画面の中の姪っ子が心底嬉しらしく、とても幸せそうな笑顔を浮かべている。浮かれた陽気にちよつぴり釣られつつ、どのタイミングで、どの道のりで帰ろうか、午後の予定を頭の片隅に思い描いた。

初出 令和三年五月一六日 MAGNET MACROLINKにて公開